

◀研究ノート▶

R. K. Mertonにおける社会調査と社会学理論

——「社会調査法」基礎研究ノート（1）——

高 島 秀 樹

目次

はじめに

1. 社会学における調査と理論

- (1) 社会学における「実証」の伝統
- (2) 社会調査と社会学理論の関係
- (3) 社会科学・社会学における中範囲の理論の伝統

2. R.K.Mertonにおける社会調査と社会学理論

- (1) 社会調査と社会学理論の関係
- (2) 中範囲の理論
- (3) R.K.Mertonの提言の意義と限界

おわりに

はじめに

本論文を出発点とするこの一連の研究の目的は、今日実証的な社会学の有力な一研究方法となっている「社会調査」について、それが研究の方法としてどのような特質を持つかを正しく認識し、さらに実証的な研究を進めていく中でそれを研究の方法として活用していくために明らかにしておくことが必要と考えられる基礎的な諸論点について、先行する社会調査についての諸研究と、社会調査研究の実践の内で積み重ねられてきた彫琢の成果を参照して⁽¹⁾明らかにしていくことである。

「社会調査」をどのようなものとしてとらえるかについては多くの考え方があるが、ここでは、社会調査を「社会、社会的事象、社会的存在としての人間を対象とし、その科学的認識を

得るための方法であり、調査者が直接対象から必要な情報を収集し、集計し、分析する技法を中心とする点に基本的な特徴がある」ものとしてとらえておく。このように社会調査をとらえ、その目的を第一義的に「科学的認識を得るため」と規定すると、そこから直ちに何のために科学的認識を得ようとするのかを明らかにすべきであるという次の検討課題が導き出される。社会調査の歴史を顧みるならば、19世紀末から西欧諸国で実施されたSocial Surveyのように社会診断・社会改良などの実践的的目的のために実態を把握することを目的とした社会調査も比較的古くから存在し、それは今日もなお存在意義を失っていないが、それ以上に今日では社会調査は社会学の実証的な研究の一方法として広く存在意義を認められていることも事実である。このように社会学の一研究方法としての社会調査

という面に注目するならば、科学的認識を得ることは社会学の研究に実証的な基礎を提供するためととらえられ、そこから社会調査は社会学がその形成を目指すべき社会学理論といかなる関係を持つかが明らかにされなければならないという、次の検討課題が導き出される。社会調査が単なるデータ収集の技法に留まらず、社会学の実証的な研究の一方法としての位置づけを得るためにもこの関係は明確にされておかなければならない最も基礎的な論点である。過去においては社会調査と社会学理論の関係が疎遠な状態に陥ったことがあったことも否定しえないが、社会調査が単なる実態報告に留まらず、他方、社会学理論が思弁的な言説の羅列に留まらないためには両者の関係が疎遠であることは望ましいものではない。そこで、本論文ではこの一連の研究の出発点として社会調査と社会学理論との関係を明確にすることを直接の課題とする。この課題に関連するこれまでの多くの研究の中で、社会調査の実践に対しても一定の有効性を持つと考えられ、今日の時点においてもなお意味を失わない提言の一つとして、R.K.Mertonの社会調査と社会学理論に関する考え方とその中核を成す中範囲の理論を示すことは基本的に異論のないものと考えられる。それ故、本論文ではR.K.Mertonの所説の検討を基礎として社会調査と社会学理論の関係についての考察を進めていくこととしたい。

1. 社会学における調査と理論

(1) 社会学における「実証」の伝統

本論文の課題を考察する前提として、R.K.Mertonの所説を検討する前に、より広い視点から社会学において社会調査と社会学理論の両者がどのように位置づけられ、どのように扱われてきたか、また社会調査と社会学理論との関係

がどのように考えられてきたかについて、1. 社会学における実証主義の伝統、2. 社会調査と社会学理論の関係についての先行的言説、3. 中範囲の理論の先行的言説、の3点から、以下で検討を加えていく。

社会学は一般にフランスのA.Comte (1798-1857) によって創始されたとされるが、A.Comteが自ら創始した学問に当初「社会物理学 (physique sociale)」と命名したことに象徴されるように、社会学はその出発時から実証的な科学としての性格を強く持っていた。A.Comteは1839年にいたって「社会物理学」の名称を「社会学 (sociologie)」に変更するが、しかしその学問的性格としては、その著『実証哲学講義』全6巻72講の構成に示されるように、実証哲学体系の一部として、数学、天文学、物理学、化学、生物学をへて社会学にいたると位置づけられることに象徴されるように、実証的な科学の一部門としての性格を失っていない。A.Comteは実証哲学の方法を実証主義としてこれを神秘主義、経験主義から区別したが、社会学については「社会諸現象に固有なもろもろの根本法則の全体の実証的研究を行うもの」と、その対象と方法を規定した⁽²⁾。

このように社会学はその成立当初から実証的な科学としての傾向を持っていたが、この社会学における「実証」の伝統について、島崎稔は「語のもっとも一般的な意味において『実証』とは、科学における仮説検証の手続きに外ならない」とした上で、「18世紀イギリス経験論に始源を持つ論理実証主義と区別された」『『社会学的』実証主義』は「フランス革命の原動力をなした啓蒙思想アンシクロペディストencyclopedistからのひとつの展開」として、C.H. de Saint-Simon (1760-1825) に出発点を持つとしている⁽³⁾。しかし、さらにSaint-Simonの思想は

A.Comteにおいて「実証的研究は、本質的には、事象の最初の起源や最終の目的などを発見することを断念し、存在するものをすべての分野で系統的に評価することに限られるべきであるが、それだけではまだ十分ではない。実証的な現象研究は、決して絶対的になってはならないのであって、常に人間の内的組織や外的状況に対して『相対的』でなければならない」⁽⁴⁾と、より具体的な研究の方法を視野に入れたものになっている。さらにこうした考え方はフランス社会学の伝統の中でE.Durkheim (1858-1917) に受け継がれ、E.Durkheimは実証主義を「合理主義の一帰結」ととらえ、「コントの徹底した批判の上に実証主義を科学としてつくりあげる」。この社会学における科学化の方法として実証主義を援用する考え方は「…(略)…社会学の軌跡を、実証主義の教説としてみる試み」すら可能とするほど普遍的なものとして展開してきており、T.Parsons (1902-1979) に代表される現代社会学にまで受け継がれているといえる。この点について島崎稔はA.W.Gouldner (1920-1980) の「この延々とつづく実証主義の由縁の頂点は、タルコット・パーソンズの構造機能主義としてあらわれており」、「現代機能主義は、19世紀の社会学的実証主義の正当の嫡子である」⁽⁵⁾との表現を引用して論証している⁽⁶⁾。他方、A.Comteの実証主義より溯るSaint-Simonをも含むフランス空想主義的社会主義の思想が、K.Marx (1818-1883) に影響を及ぼし、上述の社会学における実証の伝統とはやや異なるものの、K.Marxにおける経済=社会事象の独自の实証主義認識を求める研究にも系譜的に関連することも忘れてはならず、この点を異なった社会の実証的な研究の伝統の展開として見ることができるとも理解しておかなければならない。

こうした社会学的実証の伝統について付言す

るならば、以下で検討を加えることとなるR.K. Merton自身が初期社会学について、初期社会学が一方で「たいへん包括的な哲学の諸体系が四方八方で導入されつつあった、そういう思想的雰囲気の中で生長した」が、他方で「社会学者が自分たちの学問の思想的正当性を確立しようとするにあたって、もう一つの途がとられた」として、「つまり彼らは哲学の体系でなく、自然科学の理論体系を自分たちの原型に選んだ…(略)…」ことがあった事実を、それが「…(略)…自然科学に関する三つの基本的誤解のうちの一つ、もしくはそれ以上にもとづいていることが多い」⁽⁷⁾としつつも指摘していることが注意されるべきである。

このような『『社会学的』実証主義の思想—方法—技術としての展開』⁽⁸⁾の中で、社会調査に基づく実証的研究の成果が数多く蓄積され、社会調査の方法や技術についての彫琢も進んだことは事実であり、他方においてSocial Surveyの伝統を受け継ぐ実践的目的を持った社会調査も隆盛を見てきた。しかしながらこれらのことは必ずしも社会学における社会調査と社会学理論の関係についての論議を深め、多くの者の合意を得た考えを提起する契機とはなり得ず、かえって両者が断絶した状況のもとでそれぞれに進展していくという傾向すら生み出してきたといわざるをえない⁽⁹⁾。このように社会学において実証の伝統が存在しながらも、それを実際の研究活動の中で実現するために最も重要と考えられる社会調査と社会学理論との関係が十分合意を得るまでにいたっていないと考えられる事実の存在がこの論文の研究課題を取り上げる一つの理由となっている。

(2) 社会調査と社会学理論の関係

前述の社会学的実証の系譜に連なる社会学者の内には、自らの理論的研究や調査研究との関

連の下に、社会調査と社会学理論との関係について一定の考え方を表明したり、自らの研究の中で実践的に明らかにすることに努めて来た研究者も多く存在している。それらの研究者の中で、社会学的実証の系譜の中で一つの確固たる地位を占めるとともに、社会学の研究方法に関連して社会調査と社会学理論の関係について明確な発言をし、さらに自らも実証的な研究の成果を生み出した先駆的研究者の一人としてE. Durkheimをあげることができる。ここでは社会学研究における社会調査と社会学理論の関係についての一つの代表的な考え方としてE. Durkheimの所説を検討する。

E. Durkheimはその著『社会学的方法の規準』で自らの社会学とその研究方法に関する考え方を明らかにしているが、その出発点は社会学を「…(略)…諸社会を今あるがままに、あるいは過去において存在してきたままに論述し、説明することを目的と…(略)…」するもの、即ち「…(略)…諸事実を判然と確定し、それらの事実が生じるときに従う諸法則を発見すること…(略)…」⁽¹⁰⁾を任務とするものであるとした点にある。その上で一つの科学が成立するためには固有の研究対象と研究方法を持たなければならないと考えられるが、社会学はそれを明確に有しているとして、「対象とはすなわち社会的諸事実であり、方法とはつまり観察と間接的実験、換言すれば比較法である」⁽¹¹⁾と示している。この研究方法についてはさらに『社会学的方法の規準』の中で詳しく述べられているが、そこでは社会的事実の研究に関する「第一の、そしてもっとも基本的な規準、それは、社会的諸事実を物のように考察することである」⁽¹²⁾とされ、その上でより具体的に研究の方法は次のような特徴を持つと要約されて示されている。

1. この方法はいっさいの哲学から独立している。

2. 著者の方法は客観的である。それはあげて、社会的事実は物であり、物のように取り扱われなければならないという観念によって支配されている。

3. ただ、われわれが社会的事実を物のように考察するといっても、それは社会的な物(choses sociales)として、ということなのだ⁽¹³⁾。

先に示した「観察と間接的実験、換言すれば比較法」とは、このような特徴を持つべきと考える方法をより具体的な技法として示したものであると理解されるが、同時にそれは今日の意味・用法における社会調査の概念と重なり合う技法を用いて研究を進めていくことを示したものと理解して誤りではない。一方、E. Durkheimは社会学理論については、「法則の発見」を社会学の任務としたことから理解されるように、実証的な方法、いにかえるならば社会的事実の観察・間接的実験・比較法による解明の上に客観的・実証的な法則として定立されなければならないと考えていた。この2点から総合して考えるとE. Durkheimにおいては、社会学における理論形成の営みとしての法則の定立はその方法として客観的な方法、より具体的な技法としては社会調査に依存するものと考えられていたといえる。

こうした考え方をE. Durkheim自身が実証的研究に適用した代表的な研究成果として『自殺論』がある。E. Durkheimはそこで当時利用可能な限りのヨーロッパ諸国の自殺に関する統計を基礎とし、それに社会学的視点による分析を加え、自殺を引き起こす社会的要因によって「自己本位的自殺」、「集団本位的自殺」、「アノミー的自殺」の3類型を導き出し、自殺を社会的事実としてとらえ、解明する試みを自ら示している⁽¹⁴⁾。この研究は今日においてもなお「…(略)…現代の社会学がようやく踏み出しはじめた経

験科学における理論構成の正しい道を切り開いた…(略)…」のもであり、「彼以前に存在したコント、スペンサー流の巨大理論グランド・セオリーとは違って、経験的な事実によって立証されうるような、いわゆる『中範囲』の理論を構成するという近代社会学の手法を具体的にしめた最初の学者は、ほかならぬデュルケムだった」⁽¹⁵⁾と高く評価されているものであり、本研究において主題としている社会調査と社会学理論の関係についても早い時期に一定の所説にもとづく成果を示したものと評価することができる。

一方、これより時代は大きく下がるが、社会調査の研究者の間でも社会調査の方法論的基盤を明確にしていこうとする志向との関連の下に、社会調査と社会学理論の関係を明確にしておかなければならないとの問題意識が生まれてきた。それに比較的早い時期に応えた一人として1929年に社会調査についての体系的な著作、『社会調査』を公刊したG.A.Lundberg (1895-1966) がいる。

G.A.Lundbergは「社会科学者は、彼らの直面する問題がもし解き得るものであるならば、それは思慮深く体系的に、社会現象を観察し、検証し、分類し、解釈することに依ってである、と確信している」が、「この接近方法アプローチの最も厳密な成功した形式は、広く科学的方法と呼ばれているが、この方法を社会的行動に適用したばあい、最も有効であることが認められている主要な技術と考察が…(略)…」社会調査であるとの認識の上に、科学を方法中心に考え「…(略)…科学的方法にしたがって研究されている一つの領域」が科学であり、「われわれのもつ或る領域の知識が、この方法によって引出されたものであるならば、そしてその知識を予測と統制の目的のためにこの領域に適用することが可能であるならば、その時、その知識の全体は、対象の性質如何に拘らず、それが科学的に引出された

限りにおいて、科学と名付けられるにふさわしいであろう」⁽¹⁶⁾としている。そして科学的方法はデータの体系的観察・分類および解釈から成るが、日常的普遍化と科学的と認められる結論との間には、形式性・厳密性・検証可能性・普遍妥当性の程度において差異があり、さらにこの4項目の程度の差異に応じて科学的手続きにも、1.手当たり次第の観察、2.広い領域または対象の体系的探査、3.十分明確にされているが孤立的である仮説を、実験又は統計的方法によって検証すること、4.体系的・統合的理論によって指導された、実験その他の厳格なデータ蒐集、の4水準がある⁽¹⁷⁾とする。これらの水準のいずれにおいても科学的方法と認められるには、1.作業仮説(working hypothesis)、2.データの観察と記録、3.蒐集されたデータの分類と編成、4.普遍化(generalization)、の4段階を経て、研究が遂行されていくことが必要であるとしている⁽¹⁸⁾。このような手続きをへて「事実の類型パターン・斉一性および継起を顕わすデータが蒐集され分類されたならば、研究されている領域のすべての同様な現象に対して所與の条件の下に適用し得るような形式で、これらの継起の簡潔な叙述或るいは記述をな…(略)…」したものが「科学的『法則』である」⁽¹⁹⁾とされる。このような科学的方法は人間の社会関係の研究にも適用されるべきであり、一般的反対論は存在するものの、「科学的調査の究極の目的が科学的法則に到達することであることは、確かに疑問の余地のないところである…(略)…」としている。社会調査はその全てが直接この目的をめざしているのではなく、行政上のまたはコミュニティの政策のために行われているものもあるとしても、基本的には科学的法則の樹立をめざす社会学の営みに寄与すべきものであり、そのための有力な方法となり得るとの認識があった⁽²⁰⁾と考えられる。G.A.Lundbergはこのように社会調査と

社会学理論との関係を考えてが、それは同時に法則定立をめざす社会学の研究全体の中で社会調査がどのような位置を占めるかを明らかにするものであり、さらにそれをうけて社会調査がどのようなものでなければならないかを示したものであったといえる。

(3) 社会科学・社会学における中範囲の理論の伝統

このように社会的実証の系譜の内においても、また社会調査についての体系的な検討の内においても、社会調査と社会学理論との関係、社会学研究全体の内における社会調査の位置などについての考察は行われてきたのであるが、そうした流れをふまえて、特にR.K.Mertonの中範囲の理論に直接系譜的に連なると考えられる先行研究について、R.K.Merton自身の考察を引用して明らかにしておきたい。

R.K.Mertonは「中範囲の社会学理論をやるべきだ」という政策は「…(略)…目新しいものでもなければ、なじみの薄いものでもない。それは強固な歴史的な根があるからである」として、自らの中範囲の理論にいたる系譜を次のように示している。

第一は、F.Bacon(1561-1626)であって、「ベーコンは彼以前の誰にもまして、科学における『中間公理』の第一義的重要性を強調した」とされ、F.Baconの「…(略)…特殊からちよつとした公理へ、それから中間の公理へと一段ずつのぼり、一番最後に最も一般的なものに達するばあい、そのばあいに限ってわれわれは科学に希望をよせることができる。…(略)…中間のものは、真の、確固たる、生きた公理であって、人間の禍福はそれに依存している」という言明を含む文章を引用して、そこに中範囲の理論の萌芽が存在することを示している⁽²¹⁾。

第二は、F.Baconを自分たちの先駆者として

引用しているJ.S.Mill(1806-1873)とG.C.Lewis(1806-1863)である。J.S.Millは「…(略)…『最も一般的な法則』を『中間原理』に結びつける論理の様式の点でベーコンと意見を異にしているが、それにもかかわらず次の言葉にはベーコンがこだましている」とR.K.Mertonはとらえ、さらに「…(略)…どの科学のばあいも、ベーコンが中間原理に与えた重要性に関して彼と意見を異にすることは不可能である」という言明を含む文章を引用している⁽²²⁾。またG.C.Lewisについては「…(略)…政治学における『限定された理論』を唱えている」とし、さらにG.C.Lewisが「特定種類の共同体だけに限って観察することによって、多数の妥当な公理が展開できるという、一歩進んだアイデアを提唱している」と評価している⁽²³⁾。

第三に、これらの「…(略)…人々の時代よりおくれて、同一ではないが類似した説明方式がカール・マンハイムによりそのprincipia mediaの概念の中で、アドルフ・レーヴェにより『社会学の中間原理』が経済過程と社会過程を連結するというテーゼの中で、またモリス・ギンスバークによりミルの扱った社会科学の中間原理の検討の中で、それぞれ提唱された」⁽²⁴⁾としている。

なおこれと関連してR.K.Mertonは先に述べたE.Durkheimについて「デュルケームのモノグラフ、自殺論は、おそらく中範囲の理論の使用と展開の古典的事例であろう」と評価している。

このようにR.K.Mertonは自らの中範囲の理論に先行する共通する内容を持った主張に対して、それがなにゆえ共鳴を受けずに、R.K.Merton自身の中範囲の理論が共鳴を生んだかという視点からではあるが、考察を加え、結果として自らの中範囲の理論に至る系譜を明らかにしている。R.K.Mertonの中範囲の理論がどのよう

な理由で多くの研究者の支持を得たかを明らかにすることはここでの考察の対象の範囲を越えることであり、後に譲るが、ここではR.K.Mertonの中範囲の理論に検討を加える前提の一つとして、それが彼自身が明らかにしたように、R.K.Mertonによって突発的に提唱されたものではなく、社会学、さらには社会科学における方法論的思考の伝統の内に根拠を持つものであり、R.K.Merton自身もそれを十分認識していたことを明らかにしておきたい。

2. R.K.Mertonにおける社会調査と社会学理論

(1) 社会調査と社会学理論の関係

R.K.Mertonは自らの社会調査と社会学理論とに関する所説と中範囲の理論の提言を体系的に示した、主著ともいえるべき『社会学理論と社会学構造』において、何よりも先に「序言」において、自分自身の社会学的関心が「…(略)…第一に社会学理論と社会調査の相互作用に対する関心であり、第二に実質的理論と社会学的分析、とりわけ質的分析の手續とを漸次系統的に整理してゆきたいという関心である」⁽²⁵⁾という2点にあることを表明している。

このような問題関心を出発点としてR.K.Mertonは「いま述べた、社会学理論と社会調査の相互関係を統合しようとする関心は、いやしくも非難すべきことではない。理論と経験的調査の『統合』の望ましいことを否認するような社会学者がどこにいるだろうか」⁽²⁶⁾としつつも、社会学理論の歴史を見ると、「われわれのいうことが真実かどうかはわからないが、しかし少くともそれは重要な意義をもっている」というモットーに特徴づけられる「…(略)…何よりも一般化を求め、社会学的法則の樹立に達する途をできるだけ速やかに発見しようとする社会学者」と、「真実はしかじかかくかくであって、

それは論証できるが、その意義を指摘することはできない」というモットーに特徴づけられる「…(略)…自分らのやる調査の意味合いを余り厳密に追及しないで、自分らの報告する事実はどうだと、自身満々の度胸のよい連中」がいて、この対照的な二つの主張の交替という形で社会学理論の歴史を書くことができると、実際には社会学理論と社会調査の間に乖離が存在してきた事実を示している。そしてそれに対しては両者を対置すべき何の理論的根拠もなく、両者の関係を明確にする必要があるが、それには社会調査と社会学理論の関係を相互の関係としてとらえ、その一方が他方に対してどのような意義をもつか一つづつ明らかにしていくことから着手すべきであると考えた⁽²⁷⁾。

そして、第一に社会学理論が社会調査に対してどのような意義を持つかを取り上げるが、これを明らかにするためには従来一括して取り扱われてきた「社会学理論」をそのまま全体として考えたのでは、その内部に性格が異なり、抽象度の水準が異なる別個の活動の所産が含まれていて、その意義を十分明確にできないとR.K.Mertonは考えた。そこで従来「社会学理論」として一括されていた活動の所産を6種に区分し、そのそれぞれがどのような特徴を持ち、社会調査——R.K.Mertonの用語に従えば経験的調査といわれる——に対してどのような意義を持つかを明らかにすべきだと考えた。この点についてのR.K.Mertonの考え方は次のように要約して示すことができる。

1. 方法論……一連の仮説をテストするすべを知っているということであり、テストすべき仮説を引きだすもとなった理論を知っているということとは別である。しかしこうした方法についての理論——手続きの論理——が開発・洗練されていくことは経験的研究を導き、評定するに当たってそ

れを批判する時には役立つという意味において調査に寄与する。

2. 一般の方針……実質的素材に対する一般の方針には幅の広い公準が含まれているが、それは何らかの形で考察すべきいろいろなタイプの変数を示すに止まり、特定変数間の一義的関係を規定していない。この種の事実を無視することは危険を伴うが、何ら特定の仮説を提示するものではない。これらの方針は研究に対して一つの一般的な脈絡を提供して、明確な仮説にたやすく到達できるようにしてくれる効果がある。理論家の任務は、これらの一般の方針に照らして経験的一般化を新しく説明しなおし、関連しあった特殊な仮説を展開することにある。
3. 社会学概念の分析……概念分析は確かに理論的仕事に欠くことのできない一局面であるが、概念が一つの図式の形で互いに関連させられた時に、はじめて一つの理論が出てくるのであり、それ故概念は観察さるべき事柄を限定するものであり、変数である。データの蒐集と分析を導く概念の取捨選択は互いに何の関係もないような概念が選ばれば、その後の観察と推理がどんなに細心に行われようとも、その研究は不毛になるので、経験的研究にとって決定的意義をもつ。また、概念の明確化は他の機能として一定概念の下に包摂せられるデータの性格を明らかにし、データが何を包含し、何を排除しているかを正確に示すことによってデータの再構成に寄与しているのである。
4. 社会学上の事後解釈……あらかじめ設定しておいた仮説を経験的にテストするのではなくて、観察が行われた後に解釈を導入する。本来解釈は必然的に事実在先がける予

測的なものでなければならないが、経験的調査研究で予期せざる結果が出た場合は事後解釈が行われ、それが次の仮説となるという効果は認められる。

5. 社会学における経験的一般化……社会的斉一性の述べ方の二つのタイプの第一は経験的一般化であって、二つまたはそれ以上の変数間の関係について観察された斉一性を要約している個々の命題であり、まだ社会学理論に同化されていない。この種の命題は経験的調査が必要であるが、かかる命題をただ雑然と並べただけでは、科学としての社会学の素材であるにすぎない。互いに関連した一連の命題に対して、このような斉一性の及ぼす意義が一応はつきりしたときに、はじめて理論の任務が始まり、経験的調査が理論に指向するようになる。
6. 社会学理論……社会学的一般化の第二のものであり、科学的法則として一つの理論から引き出される恒常性についての立言である。経験的一般化がより高次の抽象の中で概念化され、しかもそれらの抽象が変数間の結びつきに関するもっとも一般的な立言となって現われた時に理論的適切さが出てくるのであり、それによって経験的知見の妥当範囲が拡大し一見ばらばらだと思われているいくつかの斉一性が互いに関連しあっていると見られるようになる。その理論的適切さが一度確立されると理論と調査知見との両者の累積がうまく計られ、さらに経験的斉一性が理論的立言に改められると含まれている意味を探求することによって調査の実りが増す。さらに理論は理由を提示することによって予測のための根拠を導入する。他の側面として一つの理論から引き出される推理（予測）が正確であればあるほどこの予測にふさわしい別の仮説を

たてる必要は少なくなり、別の言葉でいえば、正確な予測とデータは結論（後件）肯定の論理的誤謬が調査に及ぼす経験的影響を減殺することになる⁽²⁸⁾。

R.K.Mertonはこのように、従来一括して扱われてきた「社会学理論」を6種に区分し、各々が社会調査に対してどのように寄与しうるかを説明したが、これは社会調査と社会学理論の関係について、両者を一括して論じて明らかにしようとするいかなる試みよりも、両者の関係をより具体的に明確にすることを可能にするものであったと考えられる。このように、R.K.Mertonは基本的に社会学理論は社会調査に対して、福永安祥が「1.理論と調査を統合するための概念図式を設定し、2.調査のための仮説、問題を選択し、3.多数の特殊研究の成果を概括し、4.調査に必要な説明や予測を示唆する」⁽²⁹⁾と明確に整理して把握したような機能を持つと考えていたといえる。

一方、社会調査——R.K.Mertonの用語に従えば経験的調査——は社会学理論に対して、最も基本的には理論を検証し、テストするという機能を果たすが、さらにこうした受動的な役割をはるかに超えて、「調査は理論を創始し、作り直し、方向をかえ、また明確化するのである」とR.K.Mertonは主張する。そしてより具体的に、社会調査の社会学理論に対する意義には次の4種があると整理して、そのそれぞれの寄与の仕方をおのづかに示している。

1. 掘り出し型……予期しなかった、変則的な、戦略的なデータを発見することによってこのデータが研究者をして理論を拡充させ、新しい研究方向に向かうよう圧力を加える。
2. 理論の作り直し……新しいデータは、概念図式の仕上げに圧力をかけるのであって、従来看却されていた諸事実がくり返し

観察される場合にも、一つの主題に通常適用されている既存の概念図式がこうした諸事実を十分に考慮しない場合には、調査が執拗に図式の作り直しに圧力をかける。

3. 理論的焦点の転換……経験的調査の新しい方法は、理論的関心の新しい焦点の成立を促す。経験的調査は理論のより一般的な発展傾向にも影響を及ぼすのであり、盛んに調査の行われている地点へ理論的関心の焦点を移すような調査手法の案出を通じて行われる。
4. 概念の明確化……経験的調査は概念の明確化を促すのである。概念の明確化は、通常、問題の変数の指標を確立するという形で経験的調査の課題となる。それはまた経験的調査の要件そのものが既成概念の明確化に役立つのである⁽³⁰⁾。

このようにR.K.Mertonは社会調査が社会学理論に対してどのように貢献するかを4点に整理して明確に示しているが、これについても、福永安祥が「1.調査の結果が理論をテストし、2.新しい事実の発見が概念図式を明確化し、まれには、3.新しい理論の形成を示唆する。…(略)…さらに4.調査の発展が、社会学理論に新しい焦点を導く場合がある」⁽³¹⁾と要約して示したような点を明らかにした功績があったといえる。

このように社会学理論はその種類に応じて社会調査に寄与し、社会調査は社会学理論に寄与しているのであって、それは相互貢献的であると同時に相互依存的な関係にあると考えられるが、その点についてR.K.Mertonもこの両者の「作用は相互的なもの」であり、「…(略)…経験的研究は理論的指向をもち、また理論は経験的に検証できなければならない」など、表現をかえて各所で言明している。そして両者の結合をたやすくするための実際的な方策として、「形式

的導出」と「系統的整理」の二つが必要であると提言している。この内、形式的導出とは具体的には「経験的調査を設計し報告する場合には、仮説と、できればその理論的根拠(想定や公準)とを明示するよう、はっきり約束しようではないか」という提言であって、「そうすれば、データの報告はそのデータが仮説に対して、ひいては根底にある理論に対して直接どういう意義をもっているかという点からみてなされるであろう」と考えている。さらにこの形式的導出は一つの理論にどのような意味が含まれているかということに我々の注意を集中させることになる。一方、系統的整理とは「…(略)…一見異った行動領域における利用可能な経験的一般化を体系化しようとするものである」。これが行われると、べつべつの経験的知見をそのままに放置することなく「…(略)…適切な暫定的仮説をたてるよう意識的に努力すれば、それ(経験的調査の意——筆者注記)は現存する理論をさらに経験的にテストしつつ、一層それを拡充することになるに違いない」⁽³²⁾と考えている。さらに、説明を系統的に整理することによって、いくつかの経験的知見が単一の脈絡の中で再検討されることがなかったら簡単に見逃されていたと思われる理論的問題を提起することができるようになり、系統的整理は妥当な社会学理論と適切な経験的調査の相互発展を助けるであろうとしている。

こうした具体的方策を提言していることも合わせて考えると、R.K.Mertonの主張の内には、福永安祥が指摘するように「理論は1.あらゆる調査をひとしく促進するものではないこと、2.観察を一定の方向に偏寄する可能性をもつこと、に注意する必要がある」⁽³³⁾という問題点が存在することは完全に否定しえないものの、基本的に社会調査と社会学理論との関係を相互的なものと認識し、各々が互いに他に対してどのよう

に貢献していくことができるかを具体的に明らかにし、さらにそれを実現するための実践的な研究活動の内における方策をも明らかにする功績があったと評価することができる。

(2) 中範囲の理論

R.K.Mertonはこのように社会調査と社会学理論との関係のあるべき姿について明確な所説を展開したが、さらに社会調査と社会学理論の関係を緊密化し、それを実践的な研究活動の内 で実現していくために「中範囲の理論」を提唱した。

R.K.Mertonは中範囲の理論について説明する前提として、ここでは社会学理論を「…(略)…経験的斉一性が導き出されるもとなる論理的に関連しあつた命題群を指している」とし、その上で中範囲の理論とは「…(略)…日々の調査の間にうんと出てくる、ちょっとした、しかし必要な作業仮説と、社会行動、社会組織、社会変動などについて観察されたすべての斉一性を説明しようとする統一理論を展開するための、いっさいを包括した体系への努力との中間にある理論である」⁽³⁴⁾と定義づけ、社会学における「…(略)…中範囲の理論の主な用途は経験的研究の道案内をすることにある」⁽³⁵⁾とする。従来社会学理論としてイメージされてきた、社会体系の一般的理論は特定種類の社会行動、組織、変動からかけ離れすぎていて、具体的に観察される事実を説明することはできず、他方、個々の社会調査を通して明らかにされ蓄積されてきた特殊なものの詳細な秩序だった記述は一般化されてはいない。この両者の特性と境界との中間に中範囲の理論は位置するのであって、「もちろん、中範囲の理論は抽象化を含んではいるが、それらの抽象化は観察データに密着しているので、経験的検証の可能な命題の中へ編みこむことができる」⁽³⁶⁾とされ、それは社会調

査の結果として示される経験的結論と全く切り離されるほど抽象的で、検証不可能なものではないことが強調されている。

この中範囲の理論は「…(略)…いっさいを包みこむ単一の社会体系論から論理的に導きだされたものでない…(略)…」が、他方、一つ一つの社会調査の結果を集積した「単なる経験的一般化」ではなく、それ以上のものである。中範囲の理論はこれまでの理論的・実証的研究をふまえて新たに作り上げられたものであり、経験的一般化をより高次の抽象の内で概念化したものであり、具体的には「変数間の結びつきに関するもっとも一般的な立言」であり「論理的に関連しあった命題群」としての特質を持ったものとして作り上げられてきたのである。無論、中範囲の論理がある社会体系論と調和することもあるし、他方、中範囲の理論は仮説群から構成されていて、経験的一般化がそこから導き出されるということはありうる⁽³⁷⁾。そしてR.K.Mertonが中範囲の理論の例として「役割群の理論」をあげて示しているように、中範囲の理論は適切な経験的調査を直接に指示し、それによって経験的に裏づけられた理論が敷衍されてきた。他方、中範囲の理論は社会学の多種多様な理論体系としばしば首尾一貫することを通して、「或る程度の経験的確認をへた一定の中範囲の理論は、いくつかの点で互いに分裂している包括的理論の中へ包摂できることが多い」という側面をもつ⁽³⁸⁾。

このように中範囲の理論は日常的に実施される数多くの社会調査の内で提示される仮説の検証の結果を素材とするが、単にそれを経験的に一般化しただけではなく、一定範囲内で適用しうる限定的な抽象をへた想定群から成り立っているところから、社会調査にとっては特定の仮説が導き出されて、検証さるべき素材を生み出す源泉となるのであり、他方、社会学理論にとつ

てはそれがより広い理論の網の目の中へ整理統合されることによって、社会学の全体的理論体系の形成に資するものとなる。この中範囲の理論の理論構成の特色として渡辺秀樹は、「1)社会学の独自の研究問題や仮説を生み出す比較的単純なアイデアから出発し、2)比較的少数の概念群によって構成され、3)厳密に限定された問題を扱い、4)抽象度は個別事象に密着しない程度に高い」という4点をあげている⁽³⁹⁾。

R.K.Mertonがこの中範囲の理論を提唱したのは、社会学理論が前進するためには、互いに関連しあった、1.特殊理論を開発して、そこから経験的に研究できる仮説を導き出すこと、2.特殊理論のいろんなグループを統一整理するに足る、より一般的な概念図式をおいおい順を追って展開すること、の二つの課題に取り組むことが必要であり、特殊理論だけに専念することは互いに首尾一貫しないままの特定の仮説を携えて立ち現われるおそれがあり、いっさいの補助理論を導きだすための基本的な概念図式だけに専念することは科学的に不毛な社会学体系を生みだすおそれがあることから避けなければならないとの考えによる。そして社会学理論は逐次包括的となるべきであり、その「…(略)…包括的な理論は、一人の人間の頭から出てくるのではなくて、中範囲の諸理論を漸次統一整理し…(略)…」で導き出されてくるべきであり、「…(略)…中範囲の理論がより一般的な方式の特殊ケースとなるようなものでなければならない」と、自ら提唱した中範囲の理論への期待をこめて、社会学理論の形成に対する中範囲の理論の意義を示している⁽⁴⁰⁾。

以上のように考えられる中範囲の理論について、それがどのような特性を持つかを、終わりにR.K.Merton自身の要約によって示しておこう。

1. 中範囲の理論は、限られた想定群から成

り立っていて、そこから特定の仮説が論理的に導きだされ、経験的研究により確証される。

2. これらの理論は、…(略)…ばらばらのままに終始するのではなくて、より広い理論の網の目の中へ整理統合される。
3. これらの理論は、社会行動や社会構造のいろんな領域を扱うにたるほど抽象的であり、したがって単なる記述や経験的一般化の域をこえている。…(略)…。
4. このタイプの理論は、…(略)…ミクロ社会学の問題と、…(略)…マクロ社会学の問題の区別と交差する。
5. 社会学の全体的な理論体系…(略)…は…(略)…厳密な、一分の隙もない体系というより、一般理論の指向である。
6. その結果、多くの中範囲の理論は社会学上の多様な思想体系と調和する。
7. 普通、中範囲の理論は、古典的な理論方式によっている労作と直線的に連なる。…(略)…彼ら（デュルケームやウェーバーを例とする——筆者注記）の仕事が与えてくれるアイデアをわれわれは追跡しなければならないし、彼らの仕事は、理論化の戦術を例示してくれているし、問題の選択に当たって…(略)…モデルを提供してくれているし、また彼らの出した問いから展開されてくる理論的な問いを提出するばあいに、われわれを教えてくれるのである。
8. 中範囲の指向は無知がどこにあるかを明確にする。…(略)…利用できる知識に照らして現在明らかにできそうな問題に専念するのである⁽⁴¹⁾。

(3) R.K.Mertonの提言の意義と限界

上記のようにR.K.Mertonは社会調査と社会学理論の関係についての考え方を示し、さらに

それをより具体化する方策としての意味も含めて中範囲の論理を提唱した。ここでR.K.Mertonのこの二つの考え方の意義を明らかにし、さらにそれらが持つ限界も考えておくことが必要であると考えられる。

R.K.Mertonの社会調査と社会学理論の関係についての考え方は次の諸点において意義を有するものと考えられる。

1. 社会学理論と社会調査（経験的調査）の概念を明確化した。特に社会学理論については従来一括して社会学理論と呼ばれ、扱われてきた所産の内に多様な性格のものが含まれることを明らかにした。こうした概念の明確化は社会調査と社会学理論の関係を考える基礎としての意義を持つ。
2. 広義の社会学理論がその種類に応じて各々どのように社会調査に寄与しうるか、また社会調査が社会学理論にどのように寄与しうるかを具体的に明らかにした。
3. 2で示した考察を通して、社会学理論と社会調査との関係が相互依存的な関係であることを明らかにし、さらにその関係が結実していくための具体的な2方策（形式的導出と系統的整理）を示した。

次にR.K.Mertonの社会調査と社会学理論の関係についての考え方を基礎に提言された中範囲の理論は次の諸点において意義を有すると考えられる。

1. 社会学理論と社会調査との関係についてあるべき姿を理念的に提示することに留まらず、その望ましい関係を実際の研究活動を通して実現していく方策の提言としての意義を持つ。
2. 中範囲の理論に類似する思考はR.K.Merton以前に先行して伝統的に存在してきたが、それを社会学の研究、特に社会調査と関連させて、実践的な意味を持ったものと

して活用しうる形態で再提言した。

3. 社会調査にとっては、それを単なる断片的な事実の収集・羅列に終らないようにし、理論的展望を持った調査とするための方途を示した。

4. 社会学理論にとっては、社会調査が理論を検証するのみならず、新しい理論の形成に連なる素材となりうることに、その方途を示した。

このようにR.K.Mertonの中範囲の理論は社会調査と社会学理論の関係を考える上で一つの具体性を持った画期的な提言と考えられるのであるが、しかしそこには限界が存在していることも完全には否定しえない。その一例として船津衛は「…(略)…中範囲の理論によってこそ調査は方向づけられ、『道案内』され、仮説が導きだされ、結果が整理され位置づけられ、またより高次の一般化に包括されるのである」と評価しつつも次のような問題点を指摘している。

1. 中範囲の理論は、より大きな一般的理論に結びつけられず、それに位置づけられることもなく、それとまったくかけはなれたものになってしまうことも実際しばしばある。
2. 理論自体が断片化され、さらには技術化されてしまい、そしてまた人間の「主体的要求から疎外された理論技術」ともなってしまう危険性もある。
3. これらのことによって、一方に経験的調査の誇る「真実性」もうたがわしいものとなってしまい、他方また、とりあげる問題を小状況に限定してしまい、より大きな歴史的・社会的構造に結びつけられない「些末実証主義」に終わってしまうこともある。

船津衛はこれらはそれまでの経験的研究の一般的特性でもあったといえるが、より大きな歴史的・社会的構造に関する視野と結びつく真に

理論的な枠組が欠けており、逆に調査技術が優先し、それによって調査のあり方が決定される「方法論的禁制」(Mills)にとらわれて、理論が矮小化されたことに起因すると考えている⁽⁴²⁾。

またこれとはやや異なった視点から高坂健次は中範囲の理論の研究戦略として、中範囲の理論は、1. イメージ形成と鍵概念創出の段階、2. 鍵概念の吟味によるメカニズム発掘の段階、3. 経験的調査との統合を図る段階、の3段階を経て形成されていくのであり、中範囲の理論の戦略は「概念吟味の戦略」と呼べるととらえた上で、中範囲の理論のどこがものたりないかと自ら設問して、「フォーマル・セオリー」の立場からものたりない点を次のように示している。

1. 鍵概念に伴う変数が何であるのか、曖昧である。
2. 発見された社会的メカニズムが曖昧である。
3. 鍵概念からは、厳密な意味での「導出」はありえない。
4. 厳密な意味での検証になっていない。
5. 「中範囲の理論」は、理論と調査の「統合」を強調するあまり、両者の間に本来的にそなわっている緊張関係を見失わせてしまった⁽⁴³⁾。

このようにものたりない点をあげつつも、高坂健次は中範囲の理論を全面的に否定しているのではなく、「『中範囲の理論』は理論としてははなはだ不完全なものだとしても、理論構築を目指すものに対して豊かなイマジネーションを掻き立ててくれる」ことは認め、さらに中範囲の理論はそれ自体としては到達成果とはなりえず、理論構築の出発点であって終着点ではないととらえている⁽⁴⁴⁾。

これらの見解の中に、この中範囲の理論に対する今日的視点からの意義と限界についての代

表的な意見を見ることができよう。

おわりに

以上、本論文では社会学の研究方法としての社会調査について検討を加え、明らかにしておかなければならない基礎的な論点の一つと考えられる社会調査と社会学理論との関係について考察を加えてきた。そこでは第一に社会学が社会についての科学として成立して以来、いいかえるとA.Comteによって社会学が社会学と命名されて創設されて以来、社会学の内には実証の伝統が存在し、今日にまで至っていることが明らかになった。第二にその内で社会調査と社会学理論との関係について具体的な提言をしたR.K.Mertonを取り上げ、彼の社会調査と社会学理論の関係についての考え方とそれを實現する方策として設定されたとも考えられる中範囲の理論について考察を加え、そこに社会調査と社会学理論のあるべき関係についての一つの具体的な提言がなされていることを確認した。

こうした本論文での考察を通して、ここでは社会学の研究方法としての社会調査が社会学理論とどのような関係を持つべきかについて次のように一応の結論を示しておく。

1. 社会調査が単なる事実の収集や羅列、実態の報告に留まらず、社会学の研究方法としての有効性を持つためには、社会学理論との関係を明確にし、少なくとも社会学理論から導出される仮説を設定し、その検証過程としての性格を明確にした調査とならなければならない、さらにその成果を理論形成に関連づけられるような内容・形態の調査でなければならない……この意味において社会学理論は社会調査にとって不可欠な存在であり、寄与するものである。
2. 社会学理論は社会調査によってその理論としての有効性・妥当性を検証されるが、

それのみに留まらず、さらに社会学理論は社会調査の成果によって新しい理論形成の可能性を得ることがある……この意味において社会調査は社会学理論にとって不可欠な存在であり、寄与するものである。

3. 1と2から理解されるように、社会調査と社会学理論は相互依存的で、相互に欠かすことのできない関係にある。こうした関係が存在するという認識は、その具体的な様相は異なっていたとしても、社会学の歴史のうちで「社会学的『実証』の伝統」として存在し続けてきたものと理解しなければならない。
4. 以上に示した相互依存的な関係が實現され、社会学の研究活動の中で稔り豊かなものとして具体化されていくためには、社会調査と社会学理論両者の概念や内容が明確化されていなければならない、その上で両者をいかに媒介するかの方策が考えられなければならないが、そこにR.K.Mertonの考え方と「中範囲の理論」の存在意義があり、それは今日なお、有効性・妥当性を持つと考えられる。

以上、紙数の制約と原稿作成の時間的制約からR.K.Mertonの所説に関しては、彼が中範囲の理論の具体例として取り上げて考察を加え、それによって中範囲の理論の特質や有効性を示そうとした「準拠集団の理論」や「役割葛藤の理論」について検討を加えられなかった点が本稿の限界として残るが、しかしながら以上の4点についての考えを得たことを一応の成果として本稿における考察を終わりたい。

(1990.11.30)

〔注〕

- (1) 著者は本研究の内容と深い関連を持つ研究と

- して現在教育調査の歴史について研究を進め、下記の諸論考を順次発表している。関連する論点については下記の諸論考を参照されたい。
- 『社会踏査』における教育問題の実証的把握——「教育調査の歴史」論考：その1、教育調査成立前史——（『明星大学研究紀要—人文学部—』第22号所収）1986。
- 「セツルメントにおける児童問題・教育問題の調査——「教育調査の歴史」論考：その2、教育調査成立前史（2）——」（『明星大学研究紀要—人文学部—』第24号所収）1988。
- 「E. Durkheimにおける教育の科学的認識——「教育調査の歴史」論考：その3、教育調査成立前史（3）——」（『明星大学研究紀要—人文学部—』第27号所収）1991、刊行予定。
- (2) 阿閉吉男「社会学の起源と成立」（阿閉吉男・内藤莞爾編『社会学史概論』1957. 所収）40・44～46頁。
- (3) 島崎稔『社会科学としての社会調査』1979. 1～3頁。
- (4) コント・霧生和夫訳「実証精神論」（清水幾太郎編『コント・スペンサー』（世界の名著 36）1970. 所収）156～157頁。
- (5) A. グールドナー・岡田直之他訳『社会学の再生を求めて 1』1974. 149頁。
- (6) 島崎稔 前出 7～11頁。
- (7) R.K. マートン・森東吾訳「中範囲の社会学理論」（マートン・森東吾・森好夫・金沢実訳『社会学理論と機能分析』（現代社会学大系 13）1969. 所収）13～14頁。
- (8) 島崎稔 前出 14頁。
- (9) 福永安祥『教育調査』1977. 12頁。
- (10) エミール・デュルケーム（ジャン・クロード・フィュー編）佐々木交賢・中嶋明勲訳『社会科学と行動』1988. 110頁。
- (11) エミール・デュルケーム 同前 80頁。
- (12) デュルケーム・宮島喬訳『社会学的方法の規準』1987. 71頁。
- (13) デュルケーム 同前 261・265・266頁。
- (14) デュルケーム・宮島喬訳「自殺論」（尾高邦雄編『デュルケーム・ジンメル』（世界の名著 47）1968. 所収）
- (15) 尾高邦雄「デュルケームとジンメル——近代社会学の建設者たち」（尾高邦雄編 同上 所収）43頁。
- (16) ランドバーク・福武直・安田三郎訳『社会調査』1952. 1・5頁。なお、この著書については引用にあたって当用漢字に改めさせていただいた。
- (17) ランドバーク 同前 6～8頁。
- (18) ランドバーク 同前 10～12頁。
- (19) ランドバーク 同前 11頁。
- (20) ランドバーク 同前 47頁。
- (21) R.K. マートン・森東吾訳 前出 30～31頁。
- (22) R.K. マートン・森東吾訳 同前 31頁。
- (23) R.K. マートン・森東吾訳 同前 31～32頁。
- (24) R.K. マートン・森東吾訳 同前 32頁。
- これらの原典は、Karl Mannheim (1893～1947) *Mensch und Gesellschaft im Zeitalter des Umbaus* (1935)、Adolf Löwe (1893～不詳) *Economics and Sociology* (1935)、Morris Ginsberg (1889～1970) *Sociology* (1934) であり、その年代に注意する必要がある。
- (25) ロバート・K. マートン・森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会学理論と社会構造』1961. 1頁。
- (26) ロバート・K. マートン 同前 2頁。
- (27) ロバート・K. マートン 同前 78～79頁。
- (28) ロバート・K. マートン 同前 79～90頁。
- この要約にあたっては、飽戸弘『社会調査ハンドブック』1987. 118～121頁を参照した。
- (29) 福永安祥 前出 13頁。

- (30) ロバート・K. マートン 前出 95~109頁。
- (31) 福永安祥 前出 13頁。
- (32) ロバート・K. マートン 前出 92~93頁。
- (33) 福永安祥 前出 14頁。
- (34) R.K.マートン 前出 4頁。
- (35) R.K.マートン 同前 4頁。
- (36) R.K.マートン 同前 4頁。
- (37) R.K.マートン 同前 6頁。
- (38) R.K.マートン 同前 9頁。
- (39) 渡辺秀樹「中範囲の理論」(日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』1986.所収) 641頁。
- (40) R.K.マートン 前出 23頁。
- (41) R.K.マートン 同前 48~49頁。
- (42) 船津衛「社会事実とリサーチ」(西田春彦・新睦人編『社会調査の理論と技法』(I) 1976. 所収) 22・23~24頁。
- (43) 高坂健次「マートンの『中範囲の理論』をめぐって」(現代社会学編集委員会編『現代社会学』24 (特集=R.K.マートンの社会学) 1987. 所収) 32~38頁。
- (44) 高坂健次 同前 40頁。

[参考文献]

Merton., R.K. *Social Theory and Social Structure : Toward the Codification of Theory and Research.* 1949 (revised 1957). The Free Press.
 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』1961. みすず書房

Merton., R.K. *On Theoretical Sociology : Five Essays, Old and New.* 1969. The Free Press.

森東吾・森好夫・金沢実訳『社会理論と機能分析』(現代社会学大系 13) 1969. 青木書店

現代社会学編集委員会編『現代社会学』24 (特集=R.K.マートンの社会学) 1987. アカデミア出版会

鈴木広「社会学理論とは何か——理論と調査を媒介するもの」(佐藤毅・鈴木広・布施鉄治・細谷昂編『社会学を学ぶ』1970. 有斐閣. 所収)

ピーター・M・ブラウ・斎藤正二監訳『社会構造へのアプローチ』1982. 八千代出版

W.E.ムーア・石川実訳『機能主義』(社会学的分析の歴史 9) 1986. アカデミア出版会

Lundberg., G.A. *Social Research.* 1942. 福武直・安田三郎訳『社会調査』1952. 東大出版会

西田春彦・新睦人編『社会調査の理論と技法』(I) 1976. 川島書店

福永安祥『教育調査』1977. 明星大学出版部

島崎稔『社会科学としての社会調査』1979. 東大出版会

館戸弘『社会調査ハンドブック』1987. 日本経済新聞社

コント・霧生和夫訳「実証精神論」(清水幾太郎編『コント・スペンサー』(世界の名著 36) 1970. 中央公論社. 所収)

デュルケム・宮島喬訳『社会学的方法の規準』1987. 岩波書店

デュルケム・宮島喬訳「自殺論」(尾高邦雄編『デュルケム・ジニメル』(世界の名著 47) 1968. 中央公論社. 所収)

(たかしま ひでき、本学科助教授)